

『古代西伯耆の気象・地理に関する文献的考察』

Consideration about the weather and the geography of ancient west Hoki from literatures.

2015-8-29 西伯耆の古代を考える会会員 八尾正己

【1】はじめに：目的

マルクスは、歴史は生産力と生産関係の矛盾により進歩するという考えに基づいて、唯物史観の概念を発展させた。唯物史観では、経済活動のあり方とその変化が、歴史を発展・前進させる原動力であるとする。

すなわち、歴史は神の意志や人間の理性によってではなく、「物」によって動くとされる。

では、「物」とは何かを突き詰めて考えれば、それは**エネルギーに結びつくもの**であり、中世までは人力がこれを担っていた。そして産業革命によって石炭、石油へと変遷したわけであるが、それまでの人力は、**食料によってその存在が保証され、鉄器や木材などによってその効率が飛躍的に向上する**。

ここで食料の生産力に注目すると、**生産力は気象や地理的要因に大きく左右され**、気象と地理の両者にも相互関係がある。従って歴史を理解するためには当時の地理的背景を考慮する事が不可欠とも思われる。

西伯耆の古代史を考える場合にも同様で、当時の気象や地理を念頭に置きながら様々な考証を展開する必要があると考える。

そこで、当時の地形を考えると、現在の地形とは大きな乖離があることは容易に想像出来るが、それを全て解決する資料は十分であるとは言い難い。

しかし、現在までに行われたボーリング調査や、氷床の分析、あるいは古文献や伝承などをもとに古地形の再現がある程度可能なものとする。

最初に現在の西伯耆の地形を概観すると、米子平野は、概ね以下の山々に取り囲まれている。

西側： 行者山、ドウド山、要害山、母塚山、メイゲ平山

南側： 手間要害山、峰山、越敷山

東側： 壺瓶山、孝霊山、鍋山、飯戸山

南東： 大山およびその周囲の山々

さらに平野の内部には微高地・台地（長者原台地・大谷大地など）が存在し、日野川や各種河川が流れている。山岳部は現在も古代も大きな差異は無いかもしれないが、海岸線、河川、平野部の地形はかなり違ったものであったと推測される。

今回は、渉猟可能な文献等から弥生、古墳、飛鳥、奈良時代を中心に当時の西伯耆及び関わりのある地域の古地形の再現を試みた。



【2】調査項目

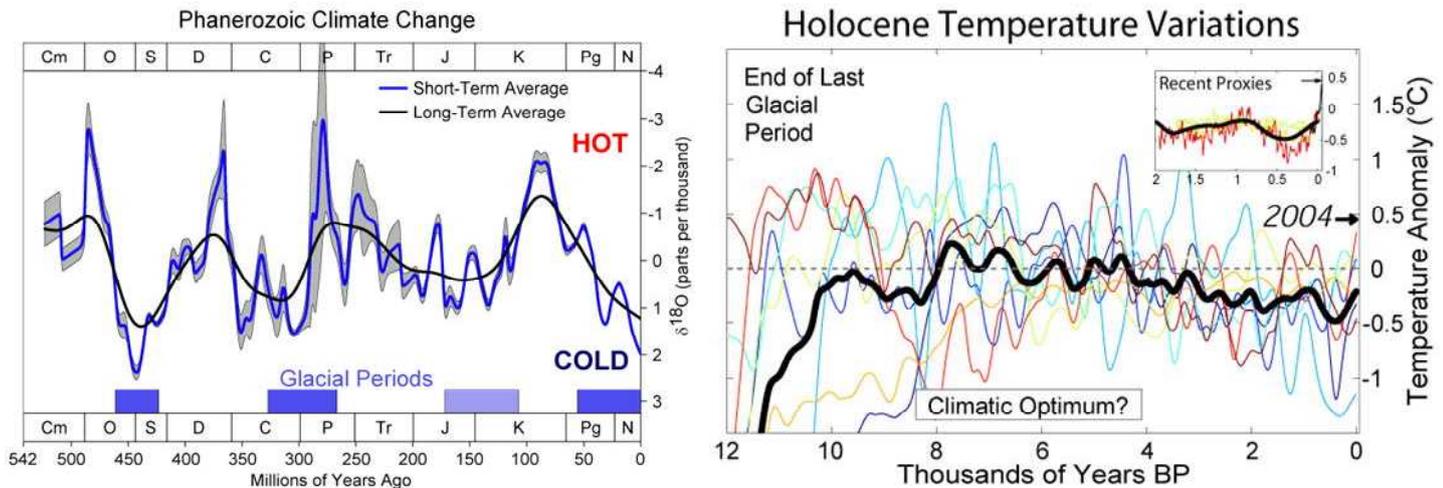
〈1〉古代の気象変動および海水面変動

(1) 気温変化

温度計による計測が始まる以前の長期にわたる記録は、年輪の幅やサンゴの成長線、氷床コアの同位体など様々な手法から得られる。これらの手法で、過去2000年間の北半球気温変化が再現されている。

① 気温変化の長期的推移

温暖期 +1～+2°C 高くなる 寒冷期 -1～-2°C 低くなる
氷河期 -5°C 低くなる



(The main figure shows eight records of local temperature variability on multi-centennial scales throughout the course of the Holocene, and an average of these :thick dark line).

② 気温変化の要因

気温変化の周期的な要因は地球の公転や、太陽の銀河系内での公転に関係しているとされる。短期間での気候変化は火山活動に拠るところが大きい。

例：地震→→火山噴火→→冷夏

864貞観大噴火→869年貞観地震→伯耆国飢(三大実録)

1707宝永地震→1707宝永大噴火→1731享保の大飢饉

③ 気温変化の影響

海水面への影響

作物への影響

冷夏 : 過去30年間の平均気温より-0.2～-0.6°C平均気温が下がると冷夏とされる。
冷夏が3年連続すると不作になる。

平安時代初頭は、伯耆国でも凶作の記録が散見される。(鳥取県史1巻)

* 補足

気温の大きな変動があった後の歴史的政変・乱・事件等との関連性を調査し、両者に何らかの相関関係を見いだすことが出来るか否かを検証したい。

(2) 日食

日食は極めて短期間の変化であるため気温や他の気象に大きな影響を及ぼすことは無い。
しかし、天文学的知識の無かった当時の古代人への心理的影響は計り知れないものがあつたと推測される。

BC206年	7月 6日	皆既日食	吉岐・対馬	朝鮮半島南部、伽耶地方
AD 53年	3月 9日	皆既日食	畿内・九州	
158年	7月13日	皆既日食	山口 愛媛	若狭湾～伊勢湾
247年	3月24日	皆既日食	日本では日没頃九州西方	
248年	9月 5日	皆既日食	福島、新潟	早朝
522年	6月10日	皆既日食(継体15年)	対馬, 山陰, 北陸, 北関東	
628年	4月10日	部分食(推古36年)	5日後推古天皇崩御	

わが国では、863年(貞観4)から、日食や月食の予報に進歩が見られる、宣明暦が施行されているが、それ以前、特に推古朝以前は、日食が起るといことは天子の不徳の致すところとして非常に重視され、日食の日は廢朝とされたものであるとも言われている。

* 補足

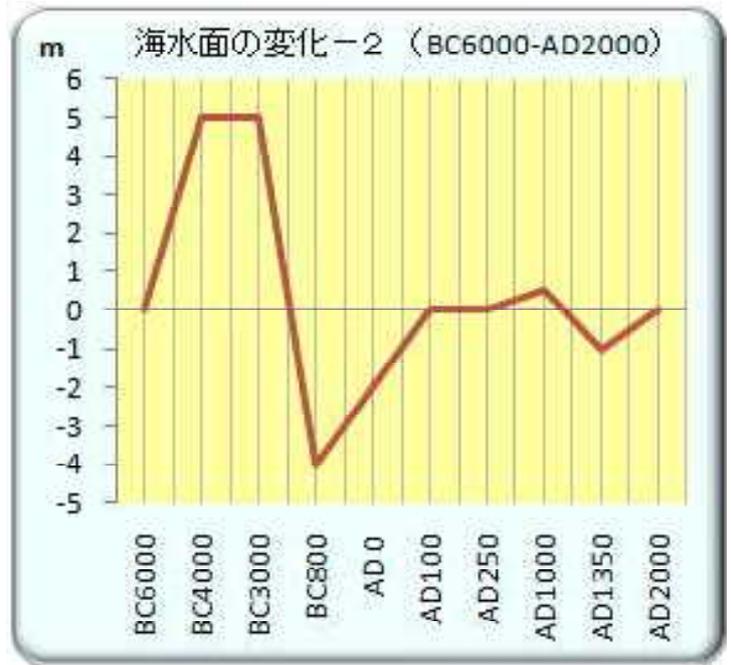
247年－248年頃の妻木晩田遺跡およびその周囲の人々が、**直接皆既日食を経験していた可能性はかなり低い**と思われる。

(3) 海水面変動

現在のような大陸の形が形成された以降(200万年前)は、平均気温の変化によって海水面が変動する。主に海から蒸発した水が(ほとんどは北半球で)氷床として固定され成長する時に海水準が低下する。氷床が後退するときに融解水が海洋に供給されることによって海水準が上昇する。現在のグリーンランドと南極の氷床が溶けると、海水準はおよそ**80m上昇**すると予測されている。

①海水面の時代的推移

BC13000年	-120m	ウルム氷河期の最盛期が終わる。
BC10500	-120m	最後の寒冷期(オールデストリアス)。 その後海水面は急速に上昇。 縄文海進
BC9000	-55m	徐々に上昇。
BC8000	-31m	徐々に上昇。
BC7000	-25m	徐々に上昇。
BC6000	±0m	現在の海拔付近になる。
BC4300	+4～5m	さらに上昇。一説には10m上昇。しかし実際には4m前後考えられている。
BC3000	+4～5m	海水面の変化は無く、高位で停滞。この後、縄文海退進む。
BC 800	-4m	縄文海退 の最盛期
AD 前後	-2m	弥生小海退
AD 700	-1m	ロットネスト海進
AD1000	-0.5m	さらに海進が続く。
AD1100	+0.5m	平安海進 。 『更級日記』で真野の長者の家(現千葉県市川市)が水没した原因はこの海進であるとされる。
AD1350	-1	パリア海退
AD2000	±0	現在の海水面。



②海水面変動の影響

当然の事ながら海水面の変動は地形に多大な影響を与え、生活範囲を限定する。

また一度海水に浸った平地は、海退後も数百年は湿地の状態が続くと言われている。

* 補足：目久美遺跡

弥生時代の初めごろ、BC400年頃からBC100年頃にかけて水田の跡が見つかった。

水田利用。-1mの深さに在ったと推測される。

農耕具は木製品(湿地帯であったと考えられる根拠)

目久美遺跡が繁栄していた時期は、縄文海退-弥生小海退の時期に付合し、海水面は-2~-4mであった。

(3)地震・津波・火山活動

山陰地方では過去1300年間に9件の津波の記録が確認された。

しかし中世以前の記録は物証に乏しい面もあり全てを信用は出来ないが、否定することも出来ない。

地震の記載は極めて多数存在。

有史以来、山陰地方における火山噴火の記載は無し。

しかしBC5300年前の鬼海カルデラの噴火で九州の縄文人が東方へ移住したように、火山活動は歴史に極めて大きな影響を及ぼす。特に阿蘇山の噴火は注意を要すると思われる。(阿蘇が大噴火すれば平均気温は-3°C下がる)

①丹後国：凡海郷の津波

日時：701年(大宝元)・・・丹後国風土記残缺

被害：若狭湾の凡海郷(島)が沈没し、頂上二つの小島(冠島、沓島)のみになる。

しかし実際に津波が発生したか否かの確証は無し。

丹後国風土記残缺より

凡海郷は、往昔、此田造郷万代浜を去ること四拾三里。□□を去ること三拾五里二歩。

四面皆海に属す壺之大島也。

其凡海と称する所以は、古老伝えて曰く、往昔、天下治しめし大穴持命と少彦名命が此地に致り坐せし時に当たり、海中所在之小島を引き集める時に、潮が凡おほしく枯れて以て壺島に成る。

故に凡海と云う。

ときに大宝元年三月己亥、地震三日やまず、此里一夜にして蒼海と為る。

漸くわずかに郷中の高山二峯と立神岩、海上に出たり、今号つけて常世嶋と云う。

亦俗に男嶋女嶋と称す。
嶋毎に祠有り。祭る所は、天火明神と日子郎女神也。
是れは海部直並びに凡海連等が祖神と斎所以也。

②石見国：鴨島を沈めたとされる津波

日時：1026年(万寿3)・・・万寿の大津波

被害：柿本人麻呂が幽閉されていた(?)とされる鴨島が沈んだ。

石見地方沿岸に大被害 津波は大田市まで及んだ可能性あり。

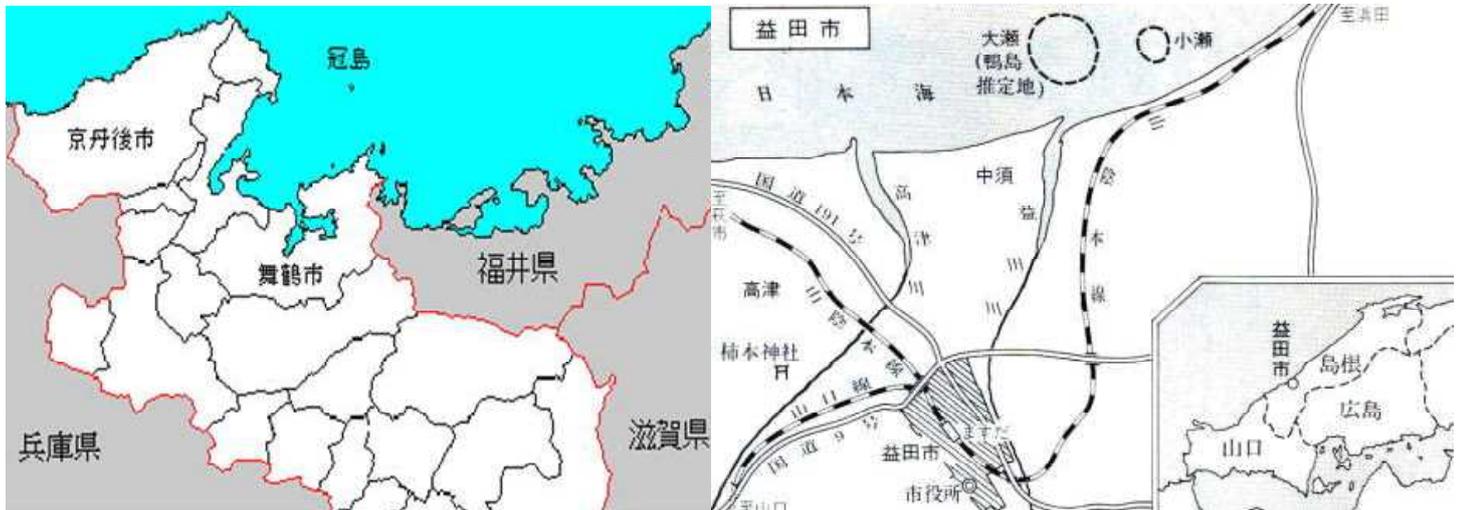
万寿津波の記録は益田市から大田市沿岸の各地で認められるが、平安時代に書かれた書物に記載はなく、益田から約240km 隔てた対岸の韓国(高麗王朝)にも万寿津波・地震の記録はないため、その発生を疑問とする説も存在する。

しかし、地名の伝承で小鯛ヶ迫、舟超坂、鯨坂、万寿津波の伝承・遺物など津波の痕跡を創造させる場所があり、年代はともかく、大津波を経験したことは事実と考えられる。

1977年に鴨島遺跡学術調査で海底潜水調査がおこなわれ1992年～1993年の鴨島学術調査においても同じ場所で潜水調査が行われた。

しかし、鴨島の跡であることを示す積極的な証拠は確認できていない。

また、1992年～1993年の陸上調査では、トレンチ発掘調査により津波堆積物が確認された。



補足：紀元前後の東南海の大津波

高知で地震、津波。

M9級の超巨大地震の発生の可能性。

高知県土佐市蟹ヶ池(海岸から400m内陸)で、約2000年前の地層から津波による厚さ50cmの堆積物が発見された。

一般的に1mの津波で1cmの堆積物が出来るとされている。

2011年東日本大震災の津波でも、堆積物の厚さは5～7cmで波高10m超である。

専門家は、この2000年前の50cm堆積物がマグニチュード9級の超巨大地震津波に由来する可能性をあげ、高知でも波高50m以上の大津波再来がありうると指摘している。

この地震・津波が山陰地方にどのように影響したかは不明だが、同時に関与の否定も出来ない。

〈2〉地形

古代より現代まで、地形は大きく変わって来た。

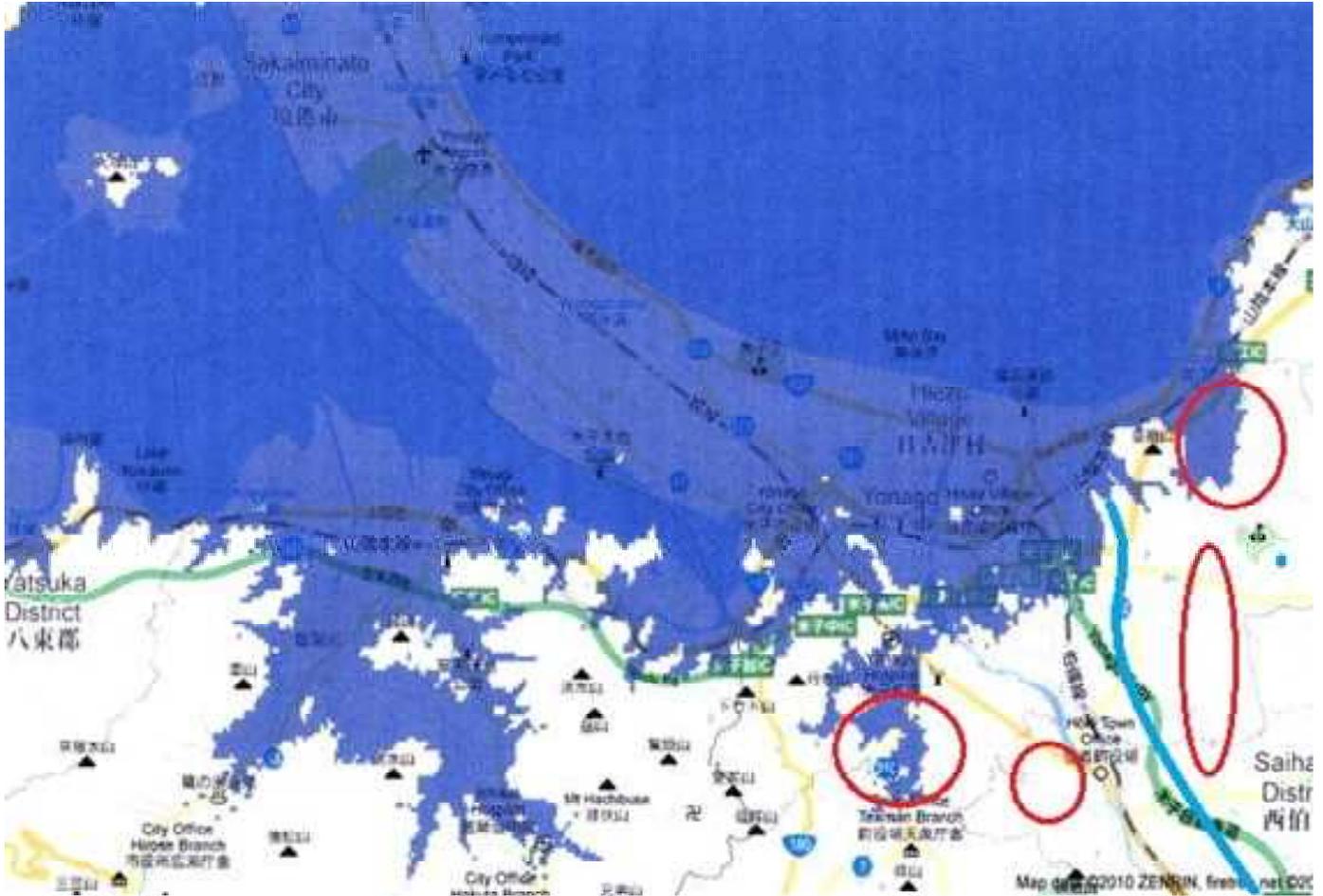
その要因としては海水面変動、沖積、地震・津波、洪水などが考えられる。

(1) 海岸線・平野・丘陵地の概観

① 海岸線

上記の要因により、海岸線は時代とともにかなり変遷したと思われる。これを時代ごとに正確に再現することほとんど不可能と思われる。

便宜的な方法としてFlad-Mapで海水面を10m上昇させてみた。



図で示すように、米子平野はほぼ海水面下となり、その後の沖積を考慮すれば、もっと内陸部まで海岸線が入り込んでいた可能性もある。

注目すべきは、安来市の比婆山付近、南部町三崎・上安曇・青木・福市付近、淀江町向山付近は海岸に近かったと考えられる。

② 平野部

しかし、縄文後期から弥生時代において海水面は今より低く、 $-1\sim-2\text{m}$ であったとされていることから、今の平野部分が全てまだ海水面下であったわけではないと思われる。

一度海水が浸潤した土地は数百年は湿地帯となると言われており、弥生時代位までは平野と言っても湿地帯の様相を呈していたことが推測される。

『続日本後記』嘉祥元年(848年)8月16日条に、会見郡における条里制に関する記載があり、平安時代には水田耕作が出来るほどの土地となっていたと解釈される。

また、縄文・弥生・古墳時代の日野川は石州府、上福万、日下、尾高の遺跡群の足下を流れていた可能性もある。

③ 丘陵地

有史以来明らかな地殻変動が無かったことから山々、丘陵地は若干の浸食は受けたであろうが、概ね現在の情景と大差はなかったと推測される。

(2) 潟湖(せきこ、かたこ、ラグーン)の形成

湾が砂州によって外海から隔てられ湖沼化した地形。ただし、完全に外海から隔てられたものはほとんどなく、ごく狭い海峡により外海とつながっているものが多い。したがって、ラグーンは塩湖である。

BC4300-BC3000頃、海水面は+4~+5m前後で停滞するが、徐々に現在の気候に近づき、海水面も下降する。この時、陸地に閉じ込められた海が出現。この海が淡水化し潟湖となっていく。

山陰の潟湖および類似するもの

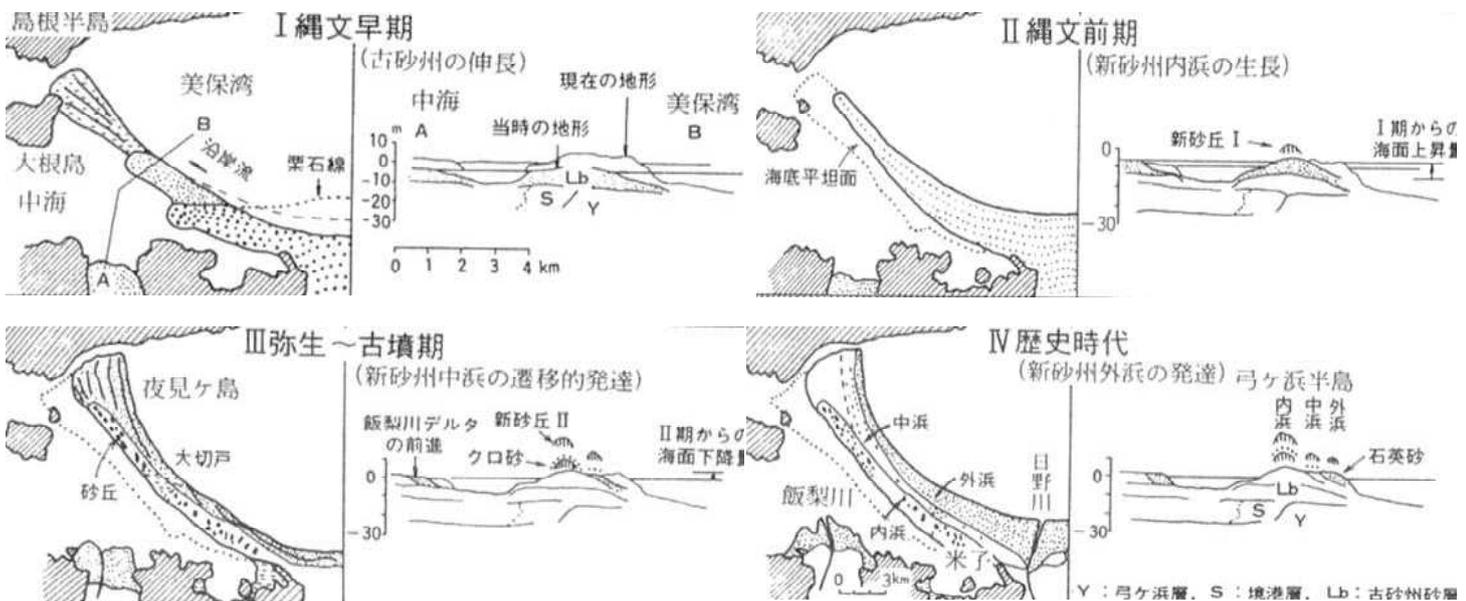
湖山池、多鯰ヶ池、水尻池、東郷池、神西湖、宍道湖、中海

補足： 淀江湖： 弥生時代以前は淀江湖という潟湖であった。

(3) 弓浜半島

上古は島であったが、その後も海水面の変化のためその姿を消したり現したりしていた。

完全に現在のような半島化したのは江戸の末期であるとも言われている。



藤島弘純著 「日野川の自然」 (富士書店 2000) P45より引用

旧石器時代

今から15000年前、最後の氷河期(ウルム氷河期)が終わる時点では、海水面は今より120m低かったと考えられている。従って、この地域は中海も宍道湖もない陸地であった。

弥生・古墳時代

海岸線が後退(縄文海退 -4m、弥生小海退 -2m)し、弓ヶ浜半島は完全に姿を表す。

その後海水面が再び上昇(ロットネスト海進 -1m)したことなどから、弓ヶ浜半島は島状の砂州となった。

飛鳥・奈良時代

弓浜半島は縞状の砂州。出雲国風土記に登場する「夜見の島」という表記からも往時の様子が窺える。

平安時代

AD1000年頃、平安海進(+0.5m)が起こり、弓浜半島は再びその姿の一部を海中に隠す。

鎌倉・室町時代

パリア海退により再び半島状の地形を表す。

応永5年(1398年)に成立した『大山寺縁起絵巻』には弓ヶ浜半島が描かれており、『境港市史』ではこれを鎌倉時代の様子ではないかと指摘している。

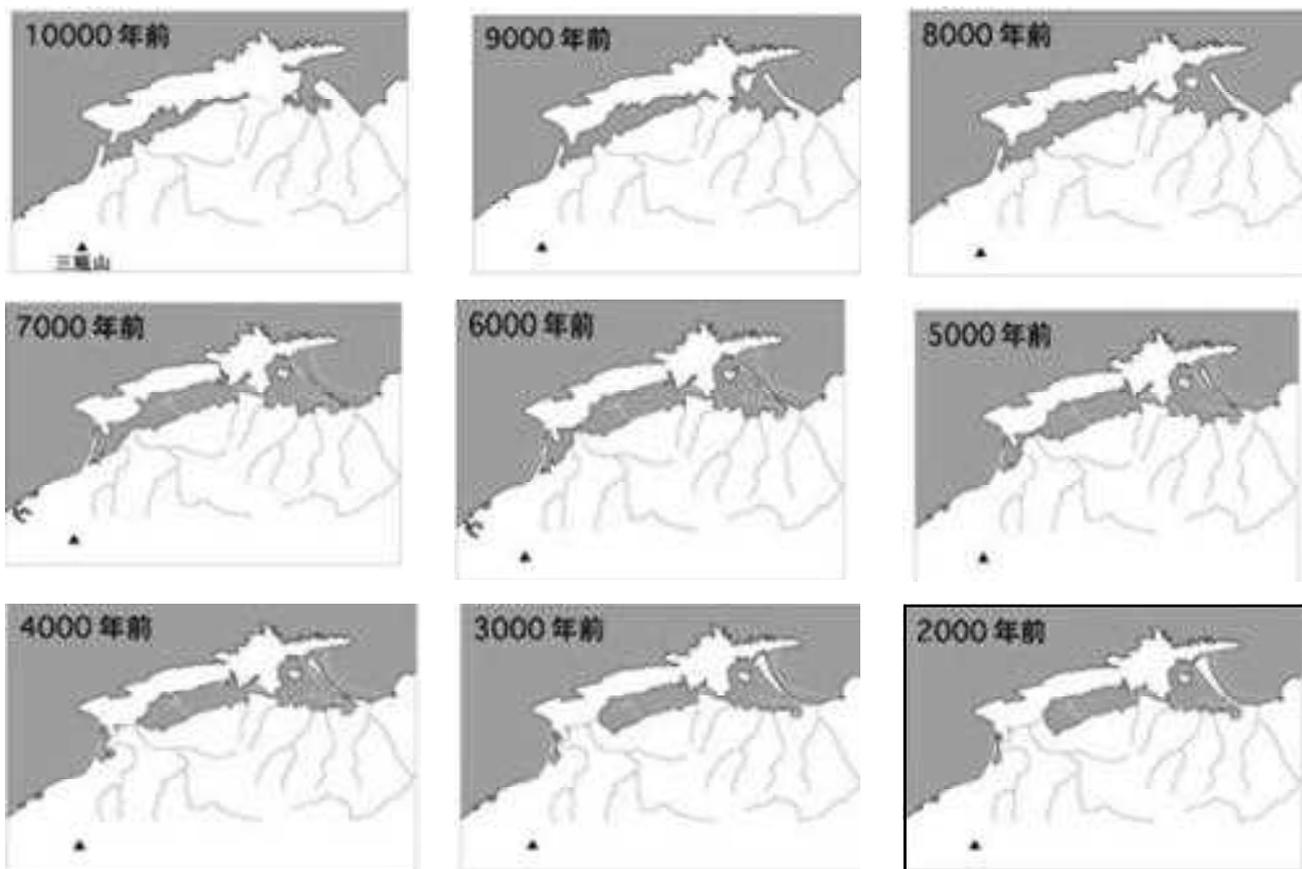
江戸時代

この夜見島が再び弓ヶ浜半島として復活したのは、中国山地で営まれた「たたら製鉄」によるものが大きいと考えられている。

たたら製鉄の原料となる良質の砂鉄を産出する中国山地は、たたら製鉄の一大生産地で、砂鉄はかんな流しと呼ばれる手法で山砂を水路に流し、軽い砂を下流に流して採取する。

大量の山砂は、水路から日野川へ、そして河口から海流に乗って夜見島周辺に堆積していった。こうして夜見の島は段々と太くなり、ついには地続きとなり、現在の中海が形成された。

(4) 中海と大根島および島根半島、出雲平野、斐伊川、神戸川、宍道湖、神西湖



① 中海

昭和43年の干拓事業が本格着工するまでは、古来より米子の食を支える宝の海であったという。

また、安来港、米子港は大型船も寄港する通商の要でもあった。

縄文時代 BC5000年頃(図:7000年前参照)

縄文海進(+5m)により、古中海湾が形成され、現在の中海の原型が形作られたと考えられている。

この頃はまだ古宍道湾(現在の宍道湖)とは繋がっていなかったが、斐伊川の堆積砂によって古宍道湾の入り口が塞がると、宍道湖の水は古中海湾へと流れるようになった。

山間部から古中海湾沿岸にかけて縄文集落(堀田上遺跡など)が現れる。宍道湖湾沿岸に縄文人出現する(菱根遺跡)。

次に日野川の土砂が海流に乗って、東の入江の入り口付近に堆積、砂州が徐々に形成され、東の入江は閉じた水域に変わっていった。

弥生・古墳時代 BC800年頃 (図:3000年前参照)

弥生時代になると、縄文海退と砂の堆積によって古中海湾の入り口に弓ヶ浜砂州が出現し、潟湖としての古中海が形成される。

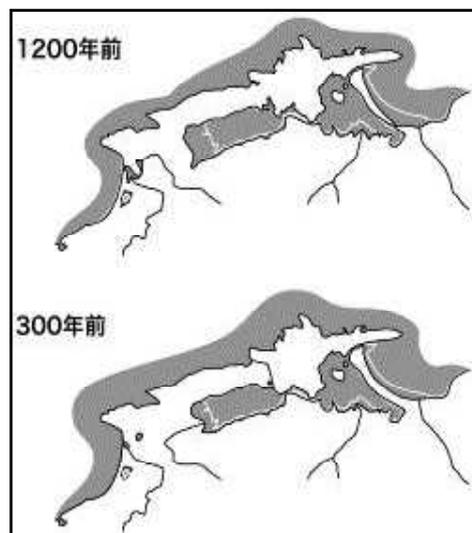
海岸線が後退(縄文海退-4m、弥生小海退-2m)し、弓ヶ浜半島は完全に姿を表す。

その後海水面が再び上昇(ロットネスト海進-1m)したことなどから、弓ヶ浜半島は島状の砂州となった。

飛鳥・奈良時代 AD700年頃(図:1200年前参照)

740年頃

奈良時代には再び海水面が上昇し 砂州は水没。中海は湾へと戻る。



『出雲国風土記』には「飢宇の入海(おうのいりうみ)」として記述され、『万葉集』では安来の湊を「於保の浦」として記述されている。「錦ヶ浦」などと呼ばれることもあった。

なお、弓ヶ浜はこのころ「夜見嶋(よみしま)」とよばれる島になっていた。

出雲国風土記に登場する「夜見の島」という表記からも往時の様子がかがえる。

平安時代 AD1000年頃

平安海進(+0.5m)が起こり、弓浜半島は再びその姿の一部を海中に隠す。

また、『更級日記』で真野の長者の家(現千葉県市川市)が水没した原因はこの海進であるとされる。

鎌倉・室町時代 AD1350年頃

パリア海退により再び半島状の地形を表す。

この時代以降に土砂の堆積や小氷期による海面の下降によって再び、夜見嶋が陸繋砂州となり、中海が形成されたと考えられている。

応永5年(1398年)に成立した『大山寺縁起絵巻』には弓ヶ浜半島が描かれており、『境港市史』ではこれを鎌倉時代の様子ではないかと指摘している。

江戸時代

この夜見島が再び弓ヶ浜半島として復活したのは、中国山地で営まれた「たたら製鉄」によるものが大きいと考えられている。

たたら製鉄の原料となる良質の砂鉄を産出する中国山地は、たたら製鉄の一大生産地で、砂鉄はかな流しと呼ばれる手法で山砂を水路に流し、軽い砂を下流に流して採取する。

大量の山砂は、水路から日野川へ、そして河口から海流に乗って夜見島周辺に堆積していった。

こうして夜見の島は段々と太くなり、ついには地続きとなり、現在の中海が形成された。

②大根島

中海に浮かぶ**火山島**。島の大きさは東西に3.3km、南北に2.2km、島の周囲は約12km。

今から約12万年ないし30万年前に形成されたと推定されている。

『出雲国風土記』には、杵築の御崎のたこを捕らえた大鷲がこの島に飛来したことにより「たこ島」と名付けられたとの言い伝えが紹介されている。

たこから太根(たく)そして大根(たいこ)と変化して今に至る。

一方、人参を大根とよびかえたのが島の名の由来という説もある

③島根半島、出雲平野、斐伊川、神戸川、宍道湖、神西湖

神門川は、神門水海(今の神西湖)に流入していた。当時は斐伊川も神門水海に流入しており、土砂の堆積によりたびたび洪水が起こり、流れが変わった。

1635年(寛永11年)と1636年の洪水を契機に人工的な流路変更(川違え)が実施され、斐伊川は宍道湖へと東流するよう固定された。元禄年間までには築堤も完成し、神戸川の現在の流れが確定した。

神西湖は神門水海(かんどのみずうみ)として記述が見られるが、この湖は現在の約3倍の周囲長を持っており、現在の形とはかなりかけ離れていた。

(5)日野川

①概要

中国山地の三国山(1004m)を源流とし、その源流付近には八岐大蛇や天叢雲剣の伝説で有名な船通山をはじめ、道後山など標高1000メートルを越す山々が連なっている。

全長約77km、流域面積860平方キロの県内最大の河川で、現在の流域内人口はおよそ60800人。

河床勾配は、上流部で1/30程度、中流部で1/190程度、下流部でも1/620程度であり、中国地方の河川の中で有数の急流河川である。この急勾配のため、斐伊川のような天井川には成らなかった。

土砂は川床にたまらず、日本海に流出した。それが弓浜半島を形成した一因であるとも推測されている。

米子平野・淀江平野は日野川の氾濫原で、洪水による被害もさることながら、おそらく交通や農業においてそれ以上の大きな恩恵を受けたものと思われる。

②日野川流路の変遷

1) 弥生時代

この頃日野川は、壺瓶山ふもとを流れていたと考えられており、この付近には妻木晩田遺跡が存在した。

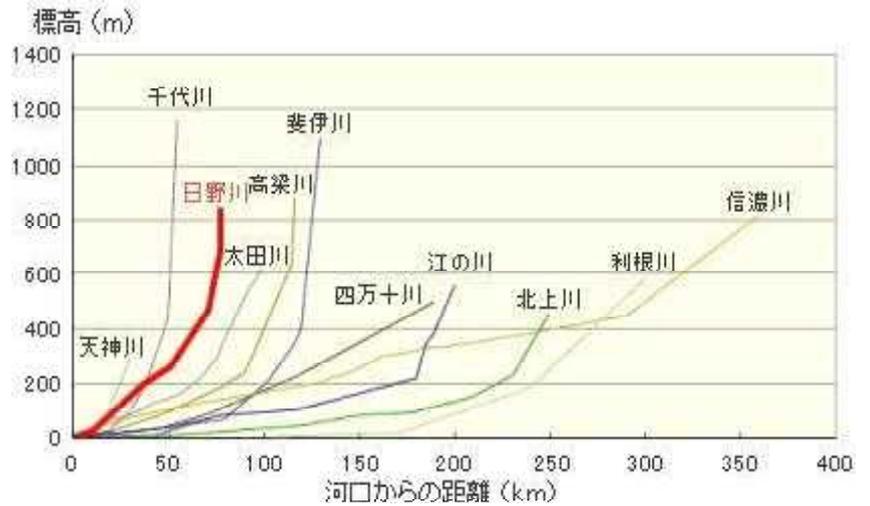
2) 古墳時代

この頃も、岸本—河岡—尾高筋を経て、壺瓶山のふもとから日本海へ注いでいたと考えられている。
淀江平野をはさむが、淀江町向山、福岡には岩屋遺跡、向山古墳群が存在する。

3) 1539年 日野川洪水記録の初見。

4) 1550年(天分19年)

大洪水により、流路を西に向け箕蚊屋平野の西側を流れるようになった。
この洪水で八幡村は2分され、馬場、八幡の二村に分かれた。千太村は流滅した。



国土交通省 「倉吉工事事務所四十年史」より引用分を改変

5) 1702年(元禄15年)

伯耆誌によれば元禄15年の洪水で法勝寺川(尻焼川)と合流。
この洪水が皆生(海池)を作ったといわれている。

補足1: 日野川の水運

- ①『日野郡史 中篇二』第7章第三節「川舟」P169 に天保の黒坂・緒形四郎兵衛による矢戸から根雨までの川舟創設に関する記載あり。
- ②『溝口町誌』IX交通(4)「川舟」P108 ①の緒形四郎兵衛の記事と明治時代、根雨の近藤喜録による、根雨から車尾までの水路開設に関する記事あり。緒形、近藤ともにたたら製鉄に関わる物資運搬だったという。
- ③『岸本町誌』第二編歴史第四章近世「いかだ」P336 には、舟のほか、竹・木を組み並べた筏をつくり、材木・薪炭・砂鉄などの産物を輸送したという記事あり。
- ④『日吉津村誌 上巻』第2章第3節「大惨災と小惨災」P856 □「たたら製鉄と日野川をめぐる諸問題」P861ハ「水運」に関連記事あり。鳥取県下の三大河川、千代川、天神川、日野川のうち、日野川はたたら・鉄穴流しのため河床の堆積物が多く水深が浅く、水運に好都合ではなかったこと。山林はたたら製鉄のため現地で消費され、いかだ流しもほかの川ほどさかんでなかった、とある。また、**米子市戸上から谷川の天津小学校下までの法勝寺川の方が舟運が盛んだったという記載あり。**

⑤『日野とその周辺』鳥取県野外学習テキスト第5集7地域とその周辺の交通②「川舟・渡し舟」P42、①と②の情報のほか日野川渡し船の簡略な記載あり。

①『鳥取県大百科』P38「筏流し」には、日野川では明治30年ごろまで筏流しがあり、岸本町吉定などには筏師の泊る筏宿があった、という記事あり。

補足:2 楽々福神社の分布

米子市上安曇→西伯町篠相→溝口町宮原→日南町印賀、日南町宮内??

(6) 加茂川

加茂川は、その源を標高258mの**島根県安来鷲頭山**に発し、米子市西南部を北東に流れ、長砂町付近で西に向きを変えて、目久美町付近で旧加茂川放水路を右岸に合わせ、米子市街西側を流下して深浦港に至り中海に注ぐ、幹川流路延長9.5km、流域面積17.3km²の一級河川斐伊川水系の支川。

流域の歴史を紐解くと、「目久美・池ノ内遺跡」からの石器発掘により、縄文時代にも人々の営みがあったことが確認されている。

古くから氾濫を繰り返し、この対策として、長砂地内で加茂川を分水して深浦注ぐ放水路(通称 新加茂川)を開削して現在の姿となり、洪水による被害は減少した。

(7) 大山

最後の噴火は約1万年前で、有史以後の噴火記録は残されていないが、火山の一生は非常に長く、特に大山の長い活動史から考えると1万年程度の休止で完全に活動停止したと考えるのは妥当ではない。

古代は「火神岳」、「大神山」と呼ばれていた。(出雲国風土記)

この「**大神山**」の神が省略されて、平安時代には、「**大山**」になったといわれている。その山麓を日野川が流れていたと考えられる。

* 補足

火、日ともにどちらも上代特殊仮名遣いでは甲音。(斐伊川の斐は乙音)

武蔵国一の宮「氷川神社」の氷は甲音。

(8) 孝霊山 (三原氏論考を参照)

(9) 壺瓶山

概要

標高 113m。上古、日野川はこの山のふもとを流れて日本海に注いでいたと考えられている。

壺瓶山の由来は、山から壺や瓶がたくさん発見されたことに始まる。

一帯から28基の古墳が発見されている。

壺瓶山33号墳(45m) 壺瓶山23号墳(32m) 壺瓶山9号墳(30m) 壺瓶山13号墳(30m)

壺瓶山16号墳(30m) 壺瓶山17号墳(25m) 壺瓶山14号墳(24m)など

付近には妻木晩田遺跡や向山遺跡もあり、調査が行われればさらなる遺跡の発掘も期待される地区である。

補足1: 伯耆志より

「坪上山 會見、汗入両郡の境に在り。官帳、坪亀に作る。田蓑日記もまた然り。山上、古の官道あり、今樵路となる。今の官道は百年前に改造れりと云えり」とある。

汗入と会見の郡境で昔は官道(駅路)が通っており小波集落辺には、天保年間に設置されたという旧山陰道の道しるべや番所跡もある。

昭和51年の淀江条里遺構調査から、上淀廃寺跡付近から坪亀山の鞍部を越え日野川を横切り伯耆国の最西の相見駅に達していたとみられている。

伯耆志が坪上山としており、壺瓶山となったのはかなり新しいものと見込まれる。

補足2: 日吉神社

遺跡群に加えて、麓には日吉神社がある。

【3】結果

〈1〉気温変動・海水面変動

縄文時代

BC11000—8000 縄文草創期

温暖化が進行し、氷河が溶けて海水面が上昇し、海が陸地に進入してきた(縄文海進の始まり)。

BC 8000—4000 縄文早期

はじめの頃は、現在よりも気温2度ほど低く、海水面も30メートルほど低かった。

その後、海水面の高さが戻る。

BC 4000—3000 縄文前期

縄文前期はじめの頃、縄文海進のピークを迎える(BC4300頃)。

海面は今より3~5メートル(+4m)高く、しばらく高値で停滞。

気温も現在より2度程度高く、以後海水面は緩序に低下。(縄文海退の始まり)

三内丸山遺跡(BC3500—BC2000頃)もこの頃を中心に繁栄した。

BC 3000—2000 縄文中期

海岸線はほぼ現在に近くなる。陸稲稲作開始。

BC 2000—1000 縄文後期

大型貝塚。内陸地域にも貝塚が出来ていた。

BC 1000—600—500 縄文晩期

気温2度前後低下。海面も低下。(−4m)

弥生時代

紀元前後頃 寒冷期 海水面−2m。 弥生小海退。

古墳時代・飛鳥時代

寒冷期 (古墳寒冷期 万葉寒冷期)

535年(Extreme weather events of 535—536) 535年から536年の寒冷期。

文献や考古資料によると、世界各地で535~536年に突発的な寒冷化と荒天などの異常気象が発生。

原因としては火山の噴火(いわゆる火山の冬)や、隕石の衝突が挙げられている。

有力な説として、クラカタウを含むスンダ海峡での巨大噴火が指摘されている。

奈良・平安時代

温暖期

AD700頃 (−1m) ロットネスト海進 (大仏温暖期)

AD1000頃 (−0.5m)

AD1100頃 (+0.5m) 平安海進

鎌倉・室町時代

寒冷期 AD1350 (−1m) パリア海退

江戸時代

やや寒冷な期間

ペルーのワイナプチナの噴火、アイスランドのラキの噴火インドネシアのタンボラ山の噴火による。

明治—現代

AD1850年頃—現在 温暖期 ±0 現在の海水面。

産業革命以後、世界の平均気温は急激に上昇(0.5~1.0℃上昇)

〈2〉地形

西伯耆の山々は有史以来大きな噴火や地殻変動に伴った変化はなく、古代と現代で大きな違いは無い。
しかし平野部は海進・海退による海岸線の変化や、日野川流路の変遷などにより現代と大きく様相を異にしていた事が推測された。

縄文時代 (+5m～-4m)

縄文海進、縄文海退による海岸線及び平野部の変化。

弥生時代 (-2m)

縄文海退により海岸線は現在よりやや後退していたであろうが、海進の影響は湿地帯を形成し、その影響は大きかったと思われる。

弓ヶ浜半島は島状の砂州となった。

古墳時代・飛鳥時代 (-2m)

日野川は、岸本―河岡―尾高筋を経て、壺瓶山のふもとから日本海へ注いでいたと考えられている。

奈良・平安時代 (-1m～+0.5m)

奈良時代には再び海水面が上昇し 弓ヶ浜半とは水没。中海は湾へと戻る。

この時期まで、南部町周辺は入り海の様相を呈していた可能性有り。

鎌倉・室町時代 (-1m)

弓ヶ浜半島はパリア海退により再び半島状の地形を表す。応永5年(1398年)に成立した『大山寺縁起絵巻』には弓ヶ浜半島が描かれている。

日野川流路の変化

日野川は、岸本―河岡筋を経て、**尾高を通り佐陀川と合流して**日本海へ注いでいたと考えられている。

(補足: 中世では、尾高城が当時の中心地であったと思われる)

1539年 日野川洪水記録の初見。

1550年(天分19年)

大洪水により、流路を西に向け箕蚊屋平野の西側を流れるようになった。

この洪水で八幡村は二分され、馬場、八幡の二村に分かれた。千太村は流滅した。

江戸時代

弓ヶ浜半島

夜見島が再び弓ヶ浜半島として復活したのは、中国山地で営まれた「たたら製鉄」によるものが大きいと考えられている

こうして夜見の島は段々と太くなり、ついには地続きとなり、現在の中海が形成された。

日野川流路の変化

1673年(延宝元年)

堤防が切れたとの記録あり。この頃にはすでに日野川の治水が行われていた。

1702年(元禄15年)

伯耆誌によれば元禄15年(1702)の洪水で法勝寺川(尻焼川)と合流。

この洪水が皆生(海池)を作ったといわれている。

明治―現代

弓ヶ浜半島、中海の形成。

日野川流路の安定化。

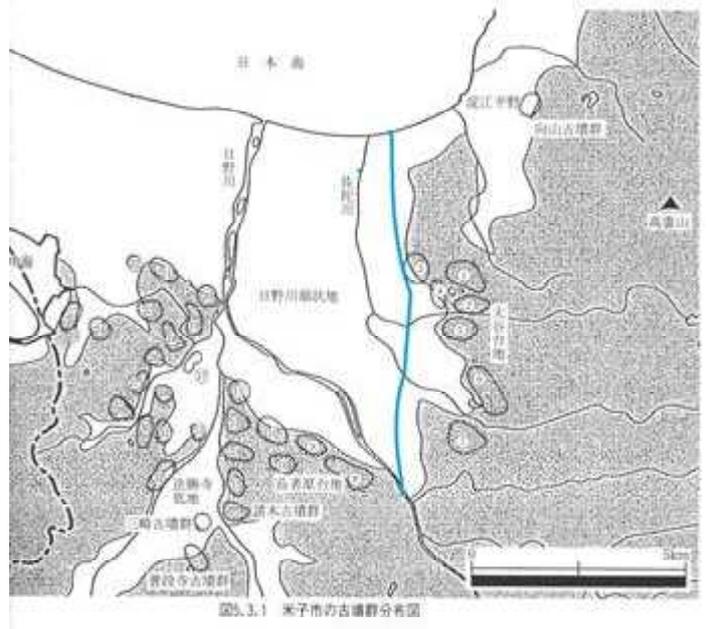
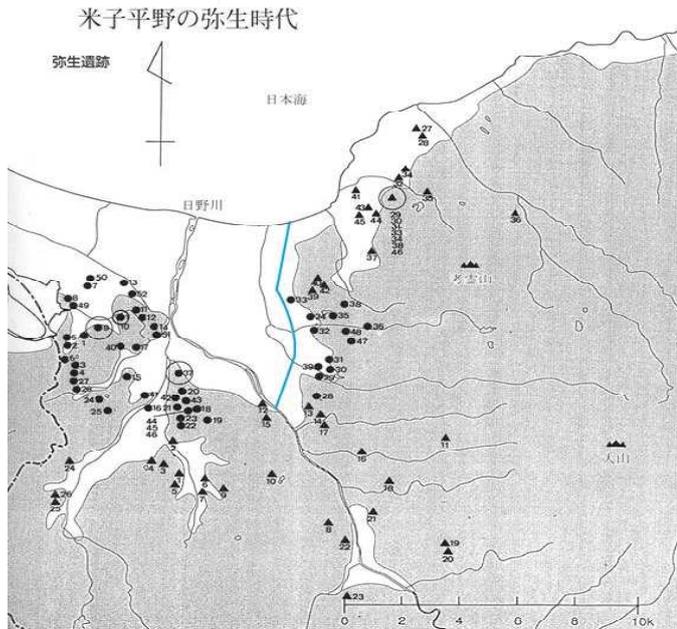
【4】考察

現在のような地図あるいは航空写真・衛星写真など無かった古代において、経時的に鮮明な地形を再現することは甚だ困難であるのかも知れない。

今回は海水面変動、ボーリング調査の結果、各種文献等から当時の地形を概観したが、考古資料、地名、伝承なども当時の地形を考える貴重な史料になり得るのはなかろうか。

以下にその概要を記載する。

(1) 遺跡から推測する古代の地形



弥生時代、古墳時代の遺跡群を観察すると、そのほとんどが丘陵地・微高地に集積している。

西伯耆に限らず、現在平野部として存在する地域は古代から現代までの間に海水面変動、洪水、沖積等によってその姿を大きく変えてきた。従って、古代人の居住区域は平野部ではなかったことが分かる。平野部は海退により海面上ではあったがおそらく湿地帯の状態で、生活には適していなかったことが窺える。

ただし平安時代以降はおそらく沖積が進み、条里制の存在からも生活空間として利用されていたと思われる。

(2) 地名から推測する当時の地形

① 会見町 (西伯町・会見町合併協議会HPより)

古代伯耆6郡の1つとして名前が残る。安不見と書かれ、**アフミの語源は「淡海」**。

昔、美保湾は中海と通じた大湖だったので、「大海」からこの名が付いたという説。

出雲国から八岐の大蛇の難を逃れてこの地方に来た稲田姫を慕って、後を追ってきた母と稲田姫が逢見した土地。伊邪那美命(いざなみのみこと)が娘と会った場所。

② 三崎

古くは見崎とも書いた。半島状に突出た地形が岬のようであるため。

岬山中腹の三崎社(現日御崎神社)に由来する。

③ 田住

明治10年～22年の村名。

石田村と住吉村が合併し、田住村となった。はじめ島根県に所属しており、明治14年から鳥取県に所属。

法勝寺川流域には上安曇、住吉が有ったことになる。また加茂川には宗像も存在。

①、②、③からも当時の会見町周辺は、入り海あるいは湖の様相を呈していた可能性が大きいと考えられる。

④淀江

江とは海や湖が陸地に入り込んだ地形。

縄文時代以来、淀江平野に潟湖が発達し、「よどんだ入江」から来ていると言われ。

⑤日吉津

三代実録に清和天皇貞観16年7月戊子、正六位上天乃佐奈咩神に従五位下を給ふ、とあるは実に当社のことなり、とある。日吉津とは日吉神社の津？

補足:「日野郡誌」第4章 神社 P354-357 伯州日野郡楽楽福大明神記録事

孝霊天皇が孝霊45年に鳥取県日野郡周辺にやってきて同71年まで賊徒を退治したと伝えられている。隠岐の黄魃鬼(コウバツキ)退治。

日吉津に上陸。孝霊山高杉神社に居住。松姫、千代姫(あるいは妻木山の朝妻姫)が侍る。

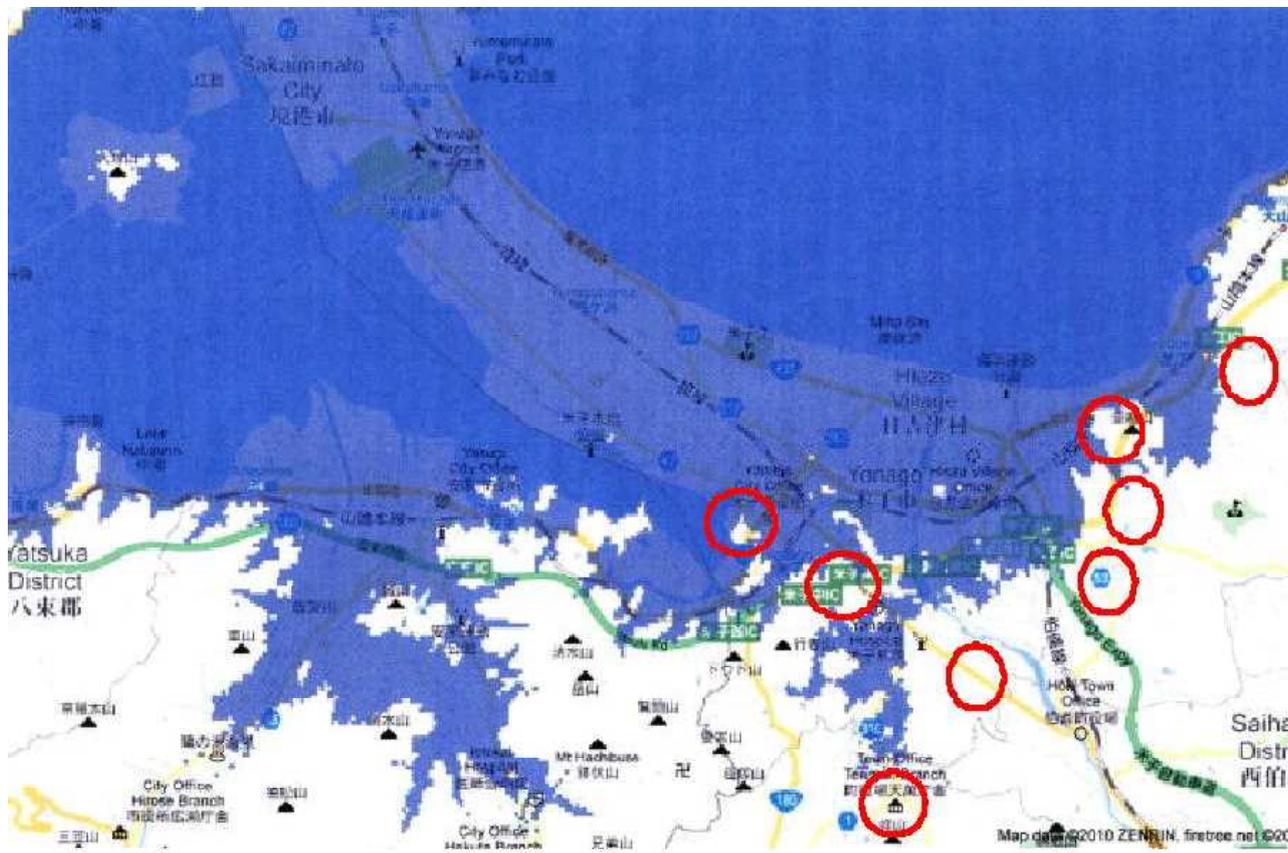
④、⑤より現在の淀江平野は、当時は入り海で良港の機能を果たしていた可能性が考えられる。

⑥皆生

古文献には「海池」との記載があり、古地図には米子城から勝田町・中島・福原村を経て日野川河口に至る小道を「海道」する記載が見られる

1570年頃八幡村の人たちが移り住んで福原村が出来たと言う説と、1702年の洪水によって皆生(海池)を作ったとする説がある。

(10)古社の位置から推測する当時の地形



古社とされる神社は、概ね海拔20m前後の位置に存在する。

これは西伯耆だけでなく、出雲大社(島根)、吉備津彦神社(岡山)、氷川神社(埼玉)など他の地域においても枚挙にいとまがない。また、内陸部に位置する神社においては、近くに必ずと言っていいほど河川が存在する

例が多い。

古代の神社の機能を鑑みると、古社は単なる礼拝所ではなく、租庸調を一旦神社に集積しそこから畿内へ搬送していたとされる。従って海上交通が主流であった当時において、神社の立地条件としてどうしても水運の便利な立地が必要で有ったと思われる。

すなわち式内社等の古社が存在していた土地は、概ね海岸線あるいは河川の近辺であり、その付近が当時の海岸線であったと想像することも許されるのではなかろうか。

実際西伯耆の古社を観察すると、概ね海拔20m付近に存在するか、日野川あるいは何らかの河川が流れていたであろう地域に立地しているのもその証左かもしれない。

【5】結語

新たな調査、発掘が行われれば覆る可能性は十分にあるが、現時点で考えられる古代西伯耆の気象・地理に関する文献的考察を行いその概要を記載した。

【参考資料】

田中義昭 「山陰地方における弥生時代の海水準について—遺跡立地からの検討—」

島根大学地球資源環境学研究報告15-1 7-25ページ (1996年 12月)

河鱒公昭1、谷川清隆 「中国・日本の古代日食から推測される地球慣性能率の変動」

天体力学N 天体力学研究会集録伊豆長岡2003/3/6-8

高橋学 「古代末以降における臨海平野の地形環境と土地開発—河内平野の島畠開発を中心に—」

歴史地理学167 1 ~15 1994.1

静岡大学防災総合センターHP 「古代・中世 地震噴火史料データベース」

<http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/erice/>

日本地震学会HP 「日本付近のおもな被害地震年代表」

http://www.zisin.jp/modules/pico/index.php?cat_id=100

寒川旭 『地震の日本史』 中公新書 2007

寒川旭 『地震考古学—遺跡が語る地震の歴史』 中公新書 1992

『新修米子市史』 第一巻 通史編 原始・古代・中世

『新修米子市史』 第七巻 資料編 原始・古代・中世

『鳥取県誌』 第一巻 原始古代 1972

『弓浜物語』 伯耆文庫第6巻 今井書店 1989

『大山をめぐる山々』 伯耆文庫第4巻 今井書店 1988

『ふるさとの古代史』 伯耆文庫第9巻 今井書店 1999

藤島弘純 『日野川の自然』 富士書店 2000

B. フェイガン 『古代文明と気候大変動』 河出文庫 2008

川幡穂高 『縄文時代の環境, その1縄文人の生活と気候変動』 地質ニュース659号, 11-20頁, 200)

国土交通省 『倉吉工事事務所四十年史』

『日野郡誌』 第4章 神社 P354-357 伯州日野郡楽楽福大明神記録事 名著出版社 1972